

北東アジア・アカデミック・フォーラム 2005 in 京都

北東アジア地域における 交流・連携の現状と展望

～人・経済・環境の交流～



フォーラム創設10周年記念「北東アジア交流連携促進フォーラム2004・北京」の
成果の共有をはじめ国内外ネットワークの強化を通じ、
これからの北東アジア地域における交流・連携と一緒に展望しませんか。

主催：環日本海アカデミック・フォーラム

日時：2005年3月19日（土）13時～17時

場所：京都リサーチパーク

プログラム

時 間	内 容
12:30	(受付)
13:00	(開会) 開会あいさつ 藤本和貴夫(環日本海アカデミック・フォーラム世話人代表) 山田啓二(京都府知事)
13:10	基調講演 篠塚保(総合研究開発機構(NIRA)国際研究交流部長) <u>「北東アジアのグランドデザイン」</u>
13:55	全体交流会議 ○「産業・経済」セッション 報告者 八木貞憲(北京フォーラム報告者・大阪産業大学大学院講師) 「東アジアの経済発展に対するグローバル企業の貢献と今後の課題」 報告者 李正熙(京都創成大学助教授) 「浦項港と舞鶴港の交流を目指して」 —浦項迎日湾新港建設を中心に— コメンテーター 松野周治(立命館大学教授) 15:00 (休憩)

15:10	○「文化・観光」セッション 報告者 鈴木勝(北京フォーラム報告者・大阪明治大学教授) 「北東アジア地域における観光都市の交流・連携の推進」 —歴史都市・京都と北京を事例として—
16:15	○「環境」セッション 報告者 天野輝芳(北京フォーラム報告者・島津製作所環境安全推進室課長) 「日本企業の環境マネジメントと環境ビジネス創出」 —株式会社島津製作所の事例—
16:55	閉会あいさつ
17:00	(閉会) (環日本海アカデミック・フォーラム会員は総会 17:00~17:20)
17:30	レセプション(1号館2階サイエンスセンタークラブ)
19:00	終了

歴史都市「京都と北京」における国際観光の現状と課題

—北東アジア地域における国際観光交流・連携を牽引する2都市—

大阪明浄大学観光学部
教授 鈴木 勝

1. はじめに

最近、北東アジア圏に位置する国々（日本、中国、韓国、モンゴル、ロシア、北朝鮮）における国際間の人的交流が活発になっている。しかしながら、この潮流が各國間で均衡が取れた状況であるかと言えば決してそうではない。日中、日韓、中韓などの特定の2国間の人的交流が主体となり、これらの国々以外の流れとの格差が大である。また、活発な動きを示すこれら3国における観光隆盛は、日中韓地域圏連携プロモーションの結果であるかと言えば、そうでもない。独自の国々の振興活動の成果がほとんどである。今後、これらの3国を含めて、当該地域がさらに人的交流を目指すならば、さらに緊密な協力・連携が必要であり、観光開発・振興を進める手法がもっとも有効であろう。このままの状態で進めば、現在の不均衡状態が継続そして拡大することになるであろう。

ところで、近年、北東アジア圏の国際観光を活発にとの掛け声が各種フォーラムなどで発表されるようになってきたが、具体的なアクション・プログラムとなると先に進めなくなっている。今後、北東アジアの観光交流拡大には、システム的な多国間観光協力・提携が不可欠である。身近な参考事例として、アセアン10カ国で展開されている観光交流拡大キャンペーン（アセアン・パラダイス観光戦略 Asia's Perfect 10 Paradise）がある。アセアン地域の国際観光の動きは、北東アジアの動き以上に活発な様相を示している。地域内の強固な観光振興には、まず地域全体の連携および情報発信が重要であるとの認識で、域内外に大々的な動きを示している。また、各種の魅力的な観光特典（地域内コンビネーション特別航空運賃など）を地域内国民以外と同時に域外のツーリストにとって魅力に感じられるものを発表している。他方、域内の観光プロフェッショナル人材養成に力を入れ、アセアン内部で定期的・合同的な教育体制を敷いている。

さて、北東アジア圏での観光振興政策に関して、活性化には単独の国・地域だけでなく、地域全体の協力・連携の必要性がもっとも必要とされているが、初期の段階では、リーダー的で中核的な存在の現出が必要であり、これらが大きく前進させる原動力になる。この観点から、昨年、京都・北京間での観光交流フォーラムの試みがあったが、さらに協力・連携体制が推進されることにより観光交流拡大の可能性が、両都市のみならず、北東アジア地域全体に生ずるであろうと考えるに至った。両都市の観光都市としての現状分析、また現在抱える問題点の解明、さ

らなる観光振興の方向性を検討することにより、より活発な観光振興が目指せるのではないかとの考えから、本テーマを論ずることにする。

2. 歴史都市「京都と北京」における国際観光

2-1. 京都における観光の現況と課題

「日本の観光を牽引する歴史都市・京都」 平安建都1200年の歴史を持つ京都は、この期間、政治・経済・文化・技術などあらゆる分野で、日本および日本文化の中心的役割を演じてきた。大都市圏機能と歴史都市・京都の固有の町並み景観や自然歴史的風土を併せ持っていることが、国際観光都市・京都の最大の特徴である。これらの自然歴史的遺産を中心とする京都観光の魅力で、国内・海外から毎年、4,000万人の観光客が訪問する日本の代表的な観光都市を形成している。2003年の京都市の観光客数（日本人および外国人）は、4,374万人であり、前年比3.7%の増加を見せている。しかし、現況を端的に言えば、京都は観光的魅力を多く有しながらも、図表1に掲示されている過去6年間およびこの20年間を見ても大きな伸びは見られず、いわゆる“横ばい”状況を呈している。

図表1 京都観光客数（日本人及び外国人）の推移

	1998年	1999	2000	2001	2002	2003
総数(千人)	38,973	38,991	40,512	41,322	42,174	43,740
前年比%	(0.1)	(0.1)	(3.9)	(2.0)	(2.1)	(3.7)
日帰り（“）	29,877	29,868	31,089	31,405	32,059	32,959
宿泊（“）	9,096	9,123	9,423	9,917	10,115	10,781
外国人客 (人)	400,017	394,588	398,252	383,897	480,828	450,433
前年比%	(-3.3)	(-1.4)	(0.9)	(-3.6)	(25.2)	(-6.3)

出所) 京都市産業観光局《京都市観光調査年報》

一方、訪日外国人の内訳を見てみれば、日本における有数の外国人訪問都市であることを示している。日本への訪問外国人全体と京都への訪問者を比較すると、全体の10%前後のシェアで推移している。国籍別に見ればアメリカ人が常に上位を占めており、欧米の割合が他都市との比較で大きいことがわかる（図表2）。その他、毎年のベスト10カ国には、イギリス、オーストラリア、ドイツ、フランス、カナダなどがランクインしている。

図表2 外国人客国籍別ベスト5（京都における宿泊ベース）

2000年		2001		2002		2003	
国・地域	宿泊者数 人・割合%	国・地域	宿泊者数 人・割合%	国・地域	宿泊者数 人・割合%	国・地域	宿泊者 人・割合

①台湾	105,935 (26.6)	①アメリカ	115,937 (30.2)	①アメリカ	130,785 (27.2)	①アメリカ	128,373 (28.5)
②アメリカ	102,351 (25.7)	②台湾	94,055 (24.5)	②台湾	71,163 (14.8)	②韓国	54,502 (12.1)
③韓国	29,471 (7.4)	③韓国	30,328 (7.9)	③韓国	51,929 (10.8)	③台湾	50,448 (11.2)
④香港	28,674 (7.2)	④中国	23,418 (6.1)	④中国	29,331 (6.1)	④中国	28,377 (6.3)
⑤中国	20,311 (5.1)	⑤香港	21882 (5.7)	⑤イギリス	20,446 (5.5)	⑤イギリス	24,774 (5.5)

資料) 京都市産業観光局「京都市観光調査年報」

近年、日本全体にアジアからの観光客のシェアが大きくなりつつあるが、京都ではこの現象に連動的な動きは見せていない。この傾向は、図表3の約20年間の、訪日外国人の訪問地別訪問率の下降状況からも状況が把握できるであろう。中でも中国人の伸び率に関して、伸長度は日本全体のそれに比して、決して大きくはない。国際観光都市・京都として、いかに今後、訪日外国人、なかんずく、アジア人を誘致できるかが、全体数を伸ばすことに大きな影響を及ぼすことになる。

図表3 訪日外国人旅行者の訪問地別訪問率 (単位)%

年度	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	2000	01	02
京都府	33.3	30.0	30.1	25.8	26.3	26.5	24.0	23.2	25.7	17.4	13.8	16.2	14.3	15.7	15.3	14.1	15.8	14.7
大阪府	34.5	32.8	35.2	30.6	35.4	30.9	27.4	27.7	29.8	25.0	22.8	22.6	20.9	22.6	25.3	23.7	25.2	27.8
兵庫県	6.8	6.3	6.7	7.3	8.5	9.6	6.1	6.7	6.8	5.3	4.7	5.2	4.9	5.6	6.1	5.6	5.5	5.8
東京都	78.7	80.7	77.4	73.6	67.8	71.0	71.7	69.4	68.4	63.8	65.0	61.8	62.6	60.9	58.3	56.0	56.5	52.7

(資料)「訪日外国人旅行者調査」国際観光振興会(JNTO)

(注) 訪問率とは、「今回の旅行中に当該地を訪問した」と答えた回答者数÷全回答者数×100により求めたもの。

21世紀の京都の発展および活性化に、観光・観光産業をあげ、従来の基幹産業といわれてきた織維産業の不振などを観光で挽回をとの期待の声は大きい。このような時期に、京都市は2001年に、2010年に年間5,000万人の観光客(日本人および外国人)が訪れる我が国を代表する「5,000万人観光都市」を実現するプランを策定し、現在、進んでいる。

2-2. 北京における観光の現況と課題

1978年に中国政府は改革・開放政策を打ち出して以来、国家経済発展を推進する資金調達の手段として、観光振興を図り、国際水準ホテルやショッピングセンターの建設、交通網の拡大整備、観光施設におけるサービスや運営など、包括的な観光開発に努めてきた。

国際観光機関(WTO)は、2020年における世界観光の長期的展望の中で、中国の躍進する国際観光に言及している。「中国は、1億3,710万人の外国観光客を迎える『受入国NO.1の国』になり、他方、世界に向けては中国人旅行者1億人を出す『送出国NO.4の国』になるだろう」との予測である。この予測の発表の後に、2001年のアメリカ同時多発テロ発生で世界的に国際観光客の落ち込みを見せたが、中国はこれを克服し、

さらに2003年にSARS（新型肺炎）に見舞われ危機に立たされたものの、急速な復旧をほぼ成し遂げている。加えて、近い将来の2008年の北京オリンピックおよび2010年の上海の万国博覧会を当面の国際観光量増強の目標と定め進んでいる。他方、2001年の世界貿易機関（WTO）加盟を機に、中国観光を取り巻くホテル、旅行会社、航空会社などの観光産業そのものが大きな発展を遂げつつあり、中国の国際観光は、いま画期的な時期にさしかかっているといえる。このように躍動する中国にあって中核的な役割を演じてきたのが歴史都市・北京である。多くの歴史上の遺産である、天安門広場、故宮博物院、景山公園、天壇公園、万里長城、明十三陵、頤和園、円明園など見所は多く、世界各国からの観光客を魅了し、2008年の北京オリンピックまで継続して行きそうな傾向にある。

図表4 北京および上海における外国人訪問者数

項目年	世界→北京	前年比	日本→北京	前年比	世界→上海	前年比	日本→上海	前年比
1995年	1,665,246	—	424,308	—	1,075,439	—	485,098	—
1996	1,761,608	105.8	429,506	101.2	1,154,841	107.4	562,672	116.0
1997	1,868,570	106.1	430,439	100.2	1,299,923	112.6	599,690	106.6
1998	1,781,800	95.4	435,156	101.1	1,175,520	90.4	508,921	84.9
1999	2,050,159	115.1	456,451	104.9	1,287,280	109.5	498,935	98.0
2000	2,379,637	116.1	543,319	119.0	1,438,992	111.8	537,565	107.7
2001	2,398,790	100.8	506,662	93.3	1,516,478	105.4	561,094	104.4
2002	2,664,535	111.1	564,546	111.4	2,159,417	142.4	822,625	146.6
2003	1,851,000	69.5	292,256	51.8	1,989,968	92.2	722,604	87.8
2004	2,681,000	144.8	523,059	179.0	—	—	—	—

参考)「上海旅游統計」(上海市旅游事業管理委員会編)

「北京市觀光局」<http://www.bjta.gov.cn/2j/lzyl/tjzl.jsp>

注意) 2003・2004年度北京数値(世界全体)は概数。

しかしながら、図表4で見られるように歴史遺産に関しては、大差のある上海が、近年、急激に国際観光面で中国内でのシェアを拡大している。まず、世界全体の北京および上海への移動を比較すれば、北京のシェアの緩慢な下降が見られる。他方、日本人の北京および上海への動向は、近年急激に上海シフトをし、現在も継続中である(ただし、2003年はSARSのために例外的な年度と判断する)。

2-3. 「京都と北京」における両歴史都市の国際観光上の異同

歴史都市・京都および北京に関して、世界の観光客誘致上、類似性を有する両都市の比較について数値を中心に行いたい(図表5および6)。

図表5 日中における外国人旅客数

日本全体	前年比	京都	前年比	京都÷全体(%)	中国全体	前年比	北京	前年比	北京÷全体(%)
1999 4,437,863	—	394,588	98.6	8.9	8,432,050.0	—	2,050,159	115.1	24.3
2000 4,757,146	107.2	398,252	100.9	8.4	10,160,432.0	120.5	2,379,637	116.1	23.4
2001 4,771,555	100.3	383,897	96.4	8.0	11,226,384.0	110.5	2,398,790	100.8	21.4
2002 5,238,963	109.8	480,828	125.2	9.2	13,439,497.0	119.7	2,664,535	111.1	19.8

資料) 中国国家観光局統計・日本の国際観光統計-2003(平成15年)

両都市の伸び率とシェアに関して述べれば、「京都」における伸び率は平均的に微増というべきであろう。他方、「北京」の伸び率に関しては、この10年間、2003年のSARS時期を除けば、順調でほぼ2桁の伸びを示していることがうかがえる。なお、2001年度における伸びの鈍化は、アメリカ同時多発テロの影響と考えられる。それぞれの国におけるシェアはどのような動きになっているか。「京都」においては日本全体の8-9%、すなわち10%に満たない状況であり果たして国際観光都市といえるかが問われそうである。これに反して、「北京」のシェアは中国全体の20-24%とかなり高い水準で推移している。しかしながら、北京におけるシェアは中国の全体から見れば、近年、下降線をたどり「京都」と同傾向を示している。ところで、日中相互で、両歴史都市をどのように訪問しているかを示したい。中国人による京都訪問が圧倒的に少ないことがわかる。他方、日本人の北京訪問は、2003年度を除いて、20-25%の数値で推移している。4-5倍の差があるといえる。

図表6 日中相互訪問者数

中国→日本	前年比	中国→京都	前年比	京都÷日本(%)	日本→中国	前年比	日本→北京	前年比	北京÷中国(%)
294,937	—	15,784	—	5.4	1,855,197	—	456,451	—	24.6
351,788	119.3	20,311	128.7	5.8	2,201,528	118.7	543,319	119.0	24.7
391,384	111.3	23,418	115.3	6.0	2,385,700	108.4	506,662	93.3	21.2
452,420	115.6	29,331	125.2	6.5	2,925,553	122.6	564,546	111.4	19.3
448,782	99.2	28,377	96.7	6.3	2,254,800	77.1	292,256	51.8	13.0

資料) 北京市観光局 <http://www.bjta.gov.cn/2j/lzyl/tjzl.jsp>

注意) 中国→京都、日本→北京は宿泊ベース

2. 歴史都市「京都と北京」の観光交流・連携上の重要性

国際観光振興上、種々の点で類似性を有する一方、共通の問題点を持つ両都市の交流・連携が重要であるが、どのような側面が考えられるか

検討したい。

「古都・歴史文化保存」 この観点から両都市を考慮した場合、より強く相互での交流・連携が必要とされている。たとえば、「北京の胡同・四合院」と「京都の町家」に関して、両者ともそれぞれの都市の歴史文化を象徴する景観であるが、保存には共通の悩みを有している。京都では、近年、保護保存の意識が高まり運動が盛んになりつつあるが、一方の北京の胡同・四合院は中国の近代化とともに、消滅するケースが少くない（注：胡同と四合院に関して。胡同（フートン）とは横丁/路地を指す。幅3m程度の道の両側に紅色や灰色の壁が続き、壁の中に四合院と呼ばれる伝統的な住宅が並ぶ。現存の多くの四合院は清朝末期に建立されたという。中庭を囲んで4棟の家屋があるのが特徴である）。

「歴史文化面以外の魅力の潜在性」 すでに検討を加えてきたが、歴史文化を誇る両都市は、国際観光客を大いに魅了しつつあるが、やや停滞の状況にある。したがって、歴史文化以外の面、例えば、近代的な側面—先端技術、ファンションなどーの観点から、新たな観光誘致の魅力を具備していかなければならないと考える。

「外国人誘致手法の情報交換」 特に、京都にあってはこの面での工夫が必要とされると思えるが、外国人観光客の総量の拡大とともに、欧米系以外の外国人誘致の手法に関して、交流・連携が必要とされている。官民による、世界に向けての観光誘致の宣伝組織、情報データ発信、人材養成・配備に関しては、北京の工夫と熱意は注目に値する。

3 まとめにかえて

—歴史都市「京都と北京」を中心とする共同観光振興と北東アジア圏—

両歴史都市が現状および問題点を認識する一方、相互に交流・連携を強め、弱点を補強することが可能であれば、北東アジア圏でリーダー的実力を発揮し、当該地域の観光活性化の拠点ともなり、同時にこの地域圏全体を牽引できること、疑いない。「京都・北京」観光推進プロモーションを歴史都市としての観点から、まず観光資源の新たな発掘を行うことが重要である。さらに、異なった視点からの魅力を開発していく必要があろう。

当該地域の大きな問題は、地域全体としての連携的観光振興アクションが、ほとんどとられていないことにあるが、活性化する2歴史都市を核として、各種アクション（共同プロモーションセンター構築、共同観光振興戦略、共同情報発信、共同観光人材育成システムなど）へと着手することであろうと考える。

4 参考文献

京都市（2001－2003）「京都市観光調査年報」京都市産業観光局

京都市（2001）「京都市観光推進計画—おこしやすプラン21—」京都市産業観光局

上海市（2004）「上海旅游統計」（上海市旅游事業管理委員会編）

山上徹（2000）「京都観光学」法律文化社

山上徹編著（2001）「おこしやすの観光戦略」法律文化社

鈴木勝（2000）『国際ツーリズム振興論（アジア太平洋の未来）』税務
経理協会